北九州大学外国語学部紀要　第89号　抜刷　一九九七年三月

西湖佳話と陳淏

古勝正義

西湖佳話と陳淏

古　勝　正　義

はじめに

『西湖佳話』の作者の問題に関して、手始めに『西湖佳話』の図版部分の跋語を書いている湖上扶揺子を取りあげ、これが『秘伝花鏡』（以下、『花鏡』と略称）の著者として知られる陳扶揺すなわち陳淏であることを、別稿「湖上扶揺子陳淏」（『北九州大学外国語学部紀要』開学五十周年記念号、一九九七）で述べた。

この湖上扶揺子すなわち陳淏と小説の作者であり序文を書いた墨浪子とは、別人であろうか。

『西湖佳話』の作者は筆名を用いて実名を隠しているが、その図版部分「西湖佳景」図には王概、王臬、王楫、孫肇功、陳扶揺の名前を出している。図版部分にこれだけの名前を並べて制作関係者の身許を明らかにしている以上、墨浪子を名乗る作者の匿名性も事実上解除されていると言わなければならない。当の作者本人が実名を隠しているのに、従たる図版の制作関係者たちが堂々と名前を出しているというのはどういうことか。

のちの『芥子園画伝』の場合から推しても、『西湖佳話』図版の制作において実際の作業にあたったの

は若い王概や王臬であったにちがいない。ところが、図版部分に跋語を書いた湖上扶揺子陳淏は、あたかも一連の仕事をすべて自分一人でやったかのように書いている（前掲拙稿）。図版部分の制作において、彼が王概らとは異なる特別の位置を占めていることを示すものである。図版制作においてだけではない。『西湖佳話』という書物全体の制作において、彼は特別の位置を占めているようである。すなわち、「私は長年（版画によって西湖の真面目を表現するという）この志を抱いてきた」云々と書いているのであって、他人に頼まれて小説の口絵を制作した画家の口ぶりではない。

一方、作者の墨浪子は、自序の末尾に、「西子湖に憧れながら親しく目にすることのできないひとは、（本書の）図をひらいて一覧されたい。臥遊となすことができよう」と書いている。そもそも、通俗小説の作者が挿図に言及するのが異例である。しかし、それにしては図版制作者の苦心に別段心遣いを見せているわけでもない。湖上扶揺子すなわち陳淏は、官途についたことはないであろうが、別稿で見たとおり、若くして才名をうたわれ、のちに『花鏡』なども著わした人物である。墨浪子という筆名の作者が湖上扶揺子陳淏と別人だとしたら、このような言い方をするだろうか。署名こそ変えてあるが、図版制作の仕事も作者自身が取り仕切ったからこそ、このような言い方になったのではないか。

湖上扶揺子陳淏はこの短篇集の作者自身である疑いが濃厚である。

陳淏は、現在、筆名によってのみ知られる清初の通俗文学のなかの少なからぬ作品に関係している形跡がある。しかし、ここではそのことに立ち入らないで、手順としてまず『西湖佳話』にかぎって問題にし、作品内容からそれが陳淏の手になるものであることが裏づけられるかどうかを見ることにする。

一

『西湖佳話』には、西湖に縁の深い十六人を主人公にした十六の物語が収めてあるが、ほとんどが歴史上の人物か伝説上の人物である。作者の創作と見なし得る作品は、おそらく、文世高と劉秀英の物語「断橋情蹟」（巻十一）のみであろう。これは一種の才子佳人小説であるが、先行作品が見あたらず、人物も物語も作者自身による創作と考えられる。これ以外は、いずれも先行する資料や作品をもとに書かれている。ただ、作者自身、自序で、「よってこれを史伝志集に考え、これを老師宿儒に微し、その蹟の最も著われ、事の最も佳きものを取りあげて、これを紀した」と書いてあるとおり、材料の出所は多様である。説部に属するものでは、『西湖遊覧志』や同『志余』、馮夢龍の作品からの取材が目だつ。たとえば、「六橋才蹟」（巻三）の、毛沢民の話および「東坡三化琴操」の話や、「霊隠詩蹟」（巻四）の駱賓王が宋之問のために詩を作る話などは『西湖遊覧志余』から採ったもの、「三生石蹟」（巻十三）は『西湖遊覧志』をもとにしたものと考えてよいであろう。

十六篇のうち、先行作品との関係が顕著なものは「三台夢蹟」（巻八）、「南屏酔蹟」（巻九）、「梅嶼恨蹟」（巻十四）、「雷峰怪蹟」（巻十五）などである。

白娘子の物語「雷峰怪蹟」は、馮夢龍の『警世通言』に入っている「白娘子永鎮雷峰塔」にわずかに筆を加えたものである（王青平「墨浪主人即天花蔵主人」、『才子佳人小説述林』一九八五）。再録と言ってもよいほどのわずかな加筆であるが、白蛇の精に向ける墨浪子の眼差しは「白娘子」の作者とは異なって

いる。

「三台夢蹟」は于謙を主人公とする。于謙については『西湖遊覧志余』巻十八などにも見えるが、本篇は、明・孫高亮『于少保萃忠全伝』（万暦二十九年または同三十九年の序）と関係が深く、これを要約した作品といってよい。もとの作品にはない逸話を加えたところがあり、また、「正人」「正気」の強調は墨浪子のものである。

「南屏酔蹟」と「梅嶼恨蹟」の二篇は、先行作品との関係から作者像を絞るにあたって、特に重要と思われる。

済顛を主人公とした「南屏酔蹟」には、先行作品として、明・隆慶年間の沈孟柟『銭塘湖隠済顛禅師語録』、明末の七楽生（馮夢龍）『済顛羅漢浄慈寺顕聖記』、清初の西湖墨浪子『済顛大師酔菩提全伝』、王夢吉『済公全伝』などがある。王青平氏の指摘があるように、本篇は、『済顛大師酔菩提全伝』のなかから十の逸話を摘録して短篇に仕立てたもの。両者の関係については、稿を改めて検討することにしたい。

「梅嶼恨蹟」は小青の物語。明末清初の一連の小青物語については、八木沢元氏の論考「小青伝の資料」（『集刊東洋学』六、一九六一）があり、また鄧長風『明清戯曲家考略』（一九九四）や王青平前掲論文においても論及される。王青平氏は、「梅嶼恨蹟」について、すべて『女才子伝』巻一「小青」篇を録してすこし書き直したものとする。

先行する作品として、まずあげられるのは戔戔居士「小青伝」である。万暦四十年（一六一二）作。明・秦淮寓客『緑窓女史』巻十二に収録される（内閣文庫蔵）。小青は武林某生の姫とし、同姓ゆえに諱むとする。一老尼が『心経』を授けたことをいう。婦（つま）の親族である某夫人が小青に同情したことをいう。没

年をいわない。九絶句、一古詩、一詞、ならびに某夫人に寄せた手紙がのこったことをいうが、録しない。作者の酒友劉無夢が姫の臥処で「南郷子」詞の三句を得たことをいい、これを録して、李易安集にもない「情話」であるという。寧波天一閣に蔵する霄賓老人手録本については、路工氏がその『訪書見聞録』（一九八五）に紹介し、一部抄録している。路工氏によれば、この伝には「小青焚余」詩詞十二首を収録するという。

詹詹外史（馮夢龍）『情史』巻十四に「小青」がある。小青は武林某生の姫とし、同姓ゆえに諱むとする。一老尼が『心経』を授けたことをいう。婦の親族である某夫人が小青に同情したことをいう。没年はいわない。九絶句、一古詩、一詞、ならびに楊夫人への書がのこったことをいい、これを録する。書は「玄玄叩首」に始まり、「興思及此、慟也何如。玄玄叩首叩首上」で終わる。生の戚（みうち）の某、これを集めて刻し、「焚余」と名づけたことをいう。戔戔居士「小青伝」から、末尾の戔戔居士の所感を再録する。「南郷子」詞の断片を載せない。

馮夢龍増編『燕居筆記』巻一にも小青伝があり、やはり伝の後に作品を録する形をとっているが、他の資料にはない「警身要語十条」が附されているという（八木沢論文）。

支如増（号は小白）「小青伝」は、天啓丙寅六年（一六二六）刻、『媚幽閣文娯』（崇禎三年刻本）に収録。名は玄玄、字は小青、姓は伝わらずとし、夫は武林の某生として名を記さない。一老尼が『心経』を口授したことをいう。文中、某夫人（婦の親族とはしない）が小青に同情したことをいう。また某夫人への書についていい、これを録する。書は、「関頭祖帳、廻隔人天」に始まり、「興言及此、慟也如何」で終わる。没年を万暦壬子歳と明記。九絶句、一古詩、一詞がのこったことをいうが、録しない。あるひと、姫の別

業で「南郷子」詞と思われる三句を得たことをいい、これを録して、李易安もこれには及ばないとする。

陳翼飛「小青伝」は、同じく『媚幽閣文娯』に収録。『媚幽閣文娯』の編者は支如増「小青伝」を改作したものとしているが、疑問。小青の名は玄玄。武林の豪公子の妾で、同姓ゆえに諱むとする。老尼のことをいわない。婦の親族である某夫人が小青に同情したことをいう。また、某夫人への書についていい、これを録する。書は「玄玄叩首」に始まり、「興思及此、慟也如何。玄玄叩首上」で終わる。小青の没年をいわない。詩十二章がのこったことをいうが、録しない。

雑劇に除士俊（野君）の「春波影」がある。天啓乙丑五年（一六二五）作、崇禎戊辰元年（一六二八）刻（鄧長風前掲書）。崇禎二年刊『盛明雑劇』所収。小青の姓は馮、名は玄玄。夫の名を馮子虚とする。八木沢元氏によれば、小青の姓を馮と明記する最初の作品という。芙蓉城の一老尼、揚州に来り、小青を見て『心経』を授けたことをいう。馮子虚の姑娘（父方のおば）にあたる楊夫人とそのむすめ小六娘が小青に同情したことをいう。のちに小六娘が死んだことをいう。楊夫人に手紙を書いたことをいう。

煙水散人（徐震）『女才子伝』に「小青」がある。同書は、順治十六年頃に序が書かれている。夫を馮生とし、小青はこれと同姓、名は玄玄とする。一老尼が『心経』を授けたことをいう。六絶句を作中にあげる。婦の親族である楊夫人が小青に同情したことをいう。そのむすめ小六娘が死んだことをいう。楊夫人への書についていい、これを録する。書は「玄玄叩首」に始まり、「玄玄叩首叩首上」で終わる。小青の没年をいわない。馮生の友人劉無夢が姫の別業を訪ね、臥処で「南郷子」詞の三句を得たことをいい、これを録して、李易安集にもない「情語」であるとする。末尾に、古詩一、絶句四、「天仙子」詞一を録する。戔戔居士の「原伝」にいささか編述を加えたものと、煙水散人自らいう。

対して「梅嶼恨蹟」はどうか。小青、姓は馮、名は玄玄、夫の馮子虚と同姓ゆえに姓を諱むとする。一老尼、芙蓉城から揚州に来り、小青を見ることをいうが、『心経』を授けたことはいわない。馮子虚の姑娘である楊夫人とそのむすめ小六娘が小青に同情したことをいう。小六娘が死んだことはいわない。絶句三（「冷語幽窗……」「新粧竟与……」「百結廻腸……」）、「天仙子」詞一を作中にあげる。楊夫人への書についていい、これを録する。書は「瞻睇慈雲」に始まり、「興言及此、痛也如何」で終わる。小青の没年をいわない。馮生の酒友劉無夢が姫の臥処で「南郷子」詞の三句を得たことをいい、これを録して、李易安集にもない「佳句」であるとする。

「梅嶼恨蹟」の先行作品のなかで、夫の名が馮子虚であることをいうのも、一老尼が芙蓉城から来たことをいうのも、「春波影」だけである。また、小青をかばう夫人を馮子虚の姑娘とするのは「春波影」であり、元宵節の灯籠見物のときに、小六娘が小青に、「揚州の灯籠は見あきたでしょう、杭州の灯籠をご覧になって目先をかえてください」と語りかける場面は、「春波影」にしかない。小青の作品を文中にあげる形式をとっているのは煙水散人『女才子伝』「小青」である。また、「梅嶼恨蹟」に載せる絶句三と「天仙子」詞一は『女才子伝』「小青」に載せるものばかりであり、姫の臥処で「南郷子」詞の三句を見つけたのを馮生の友人劉無夢とする点も共通する。墨浪子は、「春波影」と併わせて『女才子伝』も参照したと考えられる。ただし、小青が死んだあと馮婦が詩稿を焚くくだりで、「広陵散はこれより絶えたのである」と述べるのは支如増「小青伝」と共通し、小青が楊夫人に、花びらが水に落ちる夢を見た話をして死の予感を述べるときに「水中の花」という言葉を使うのは陳翼飛「小青伝」と共通するので、『媚幽閣文娯』も参照したかもしれない。

いずれにしても、「梅嶼恨蹟」は、徐士俊の雑劇および煙水散人の文言小説と最も関係がふかいことは確かである。

徐士俊は杭州の人。李漁の場合から推して、陳淏はこの同郷の先輩と交渉があったはずである。煙水散人徐震もその交遊圏内にあったと考えられる。というのは、陳淏の長子陳枚が編んだ『憑山閣増輯留青新集』（以下『留青新集』と略称）には徐震（修雷）の詞が三首収めてあるからである。この徐震はまぎれもなく煙水散人徐震であって(1)、その作品が『留青新集』に採られていることは、陳淏と徐震とのあいだに交遊があったことを窺わせる。陳淏がこの二人の作品を主な材料にして新たに一篇の白話小説を書いたということは大いにありうることである。

二

陳淏（字は爻一。扶揺と号した）は、杭州・銭塘の人。杭州西湖の湖畔呉山に家があり、「浪遊」の時期をのぞいてここに住んだ。杭州人であることを誇りとし、西湖に愛着をもったことは、その署名にも現われている。若いときは「古杭陳淏子」（『周文帰』）のほかに「西湖陳淏子」（『両漢奏疏』）と署名し、入清後は、「湖上扶揺子」（「西湖佳景」図の跋語）、「武林陳扶揺」（『芥子園画伝』初集跋語）と署名し、「湖上陳氏・扶揺」の印を用い、晩年は「西湖華（花）隠翁」とも号した（『花鏡』序）。入清後の仕事である「西湖佳景」図と『花鏡』は、ともに杭州・西湖と深く関わっている。自ら制作をを取り仕切った「西湖佳話」図はもちろんのこと、『花鏡』もまた杭州・西湖と切り離しがたい書物といえる。陳淏は、杭州

人としての誇りと西湖への愛着を飽くことなく表明した人物であり、わるくいえば、杭州・西湖を売り物にした人物である。

一方、『西湖佳話』という短篇集が、西湖に親しみ、杭州・西湖の故実と現状を熟知した人物でなければ書けない作品であることは、その内容および序文から明らかである。のみならず、墨浪子を名のる作者が杭州人であることも作品内容や序文からほとんど疑問の余地がない。たとえば、杭州生まれの蘇小小や于謙について、「日々、西湖の山水にはぐくまれ……」（「西泠韻蹟」）とか、「西湖の正気をうけて生まれた」（「三台夢蹟」）といっているが、この類の言い方から一種の郷土自慢を感じとることは容易であろう。序文の署名の後に「墨浪子」の印とともに刻してある「西湖散人」の印は、杭州人として用いたものにちがいない。

陳淏は、順治十三、四年に「飢えに駆られて」南京へ行ったあと、約二十年間におよぶ「浪遊」の生活のあいだも、商業出版にかかわる文筆業者であった。それでは、その文筆業の内容は如何なるものであったのだろうか。

方象瑛「扶揺陳先生暨元配戴孺人合葬墓詩銘」（『留青新集』所収。以下、「墓誌銘」と略称）は、陳淏の南京時代の旺盛な執筆活動に触れた後、「洛陽の紙価はそれがために十倍した」と述べている。人々の評判になり売れ行きもよかったとすれば、一般に考えられるのは科挙の受験用参考書の類であろう。誠堂「記『花鏡』作者陳淏子」（『中華文史論叢』第七輯、一九七八）は、彼は選家であったと見なしている。林雲銘「寿陳扶揺先生七十序」（『留青新集』所収。以下、「寿序」と略称）に、「六経講義」や周秦両漢の文章を評定したとあり、現に彼が明清鼎革前に出した『両漢奏疏』『周文帰』などが残っているのである

から、あながち根拠のないことではない。しかしながら、「寿序」はまた、鼎革後は「後進と青紫を分かつことをやめた」とも述べているのであるから、彼が入清後も科挙受験用の書物を編んで、生計を立てていたとは考えにくい。

とすると、洛陽の紙価を高からしめた彼の「著作」とは、実は、筆名を用いて刊行した通俗文学作品の類だったのではないか。方象瑛が、その裁定した書はますます「広く」なったと述べている点も（「墓誌銘」）、なにかいわくありげである。

南京時代に限らず、彼が通俗文学とたいへん近いところに身を置いていたことは、まぎれもない事実である。通俗文学の大作家李漁は彼の杭州時代からの友人であり、南京へも李漁の「杖履の老友」として行ったのであった。その文筆活動も李漁のそれとさほど懸け離れたものではなかったと推測される。

陳淏父子は南京では王概一家とも親しく、「西湖佳景」図制作の仕事を、陳淏は王概兄弟らとともにやった。もっとも、実際の作業に当たったのは若い王概たちだったにちがいない。しかし、いずれにせよ、図版の制作のような副次的、従属的な仕事が、文筆業によって生計を立てる陳淏の本来の仕事であったはずがない。もともと文才に恵まれ書物の出版にも経験を持っているのであるから、その文才と経験は何よりもまず通俗文学そのものに活かされたであろう。

墨浪子と南京の関係はどうか。『西湖佳話』のなかに作者墨浪子がそこに居住していたことを示す確たる証拠はない。ただ、このような杭州西湖を売り物にした書物が、杭州においてではなく、南京の版元から刊行されているという点は注目される。作者が杭州西湖とばかりでなく南京とも縁のふかい人物であることを推測させるからである。別稿「湖上扶揺子陳淏」で触れたように、『西湖佳話』を刊行した「金陵

王衙」とは王概一家の書肆と考えられる。南京に住み、王概一家が協力者として身近にいた陳淏がその作者なら、納得がいく。また、『西湖佳話』の序は康熙十二年（一六七三）に書かれているが、これは言うまでもなく陳淏の南京僑居の時期に当たっている。

なお、作者が筆名の「墨浪子」に冠している「古呉」は、原籍を示したものか寄留地を示したものか判然としないが、陳淏なら杭州人として南京に僑居していたのであるから、確かに「古呉」を称する資格がある。王青平氏は、これを蘇州と関係づけて墨浪子は蘇州人かまたは蘇州に長らく住んだ人であるとするが(2)、「古呉」すなわち蘇州と断定するわけにはいかないであろう。

三

文筆家としての基本的な立場および仕事ぶりの面ではどうか。

『花鏡』自序において、陳淏は「儒家」を自称し、世間の人から「書痴」と笑われることについて、「読書こそは儒家の正務であるから、どうして痴ということができよう」(3)といっている。「挙子の業を習い」（「墓誌銘」）、「弱冠にして名声あり、文品卓卓として、儒林の領袖であった」（「寿序」）のであり、実際、『両漢奏疏』『周文帰』『漢文帰』などの書物を出したのであるから、一応、「儒家」を称する資格はあるものと思われる。また、友人の胡揆が、「爻一の志は彦和（『文心雕龍』の劉勰）の志である」と書いた（『周文帰』序）、その志とは具体的になにを意味するのか判然としないが、少なくとも彼が正統派の文章の専門家を志したことは、事実と思われる。

一方、『西湖佳話』の作者墨浪子は、白話の達者な書き手であるが、他方でまた、正統的な詩文に習熟した人物でもあるらしいことは、自序や十六篇のそれぞれの首尾の部分の書き方から窺われる。自序に、「康熙歳在昭陽赤奮若（すなわち癸丑）孟春陬月望日　古呉墨浪子題」と末署している点なども、明清の通俗小説のなかでは相当異色である。『両漢奏疏』の「凡例并引」に、「崇禎柔兆困敦（すなわち丙子）之歳月在橘且既望　西湖　陳湜子謹識」と末署していたことが思い合わせられる。

とはいえ、陳湜が正真正銘の儒家かというと、それは大いに疑問である。際立つのは、むしろ釈道二家や超常的なものに対する関心である。

「墓誌銘」によれば、彼は生前、『神仙通考』という著作を完成していた。なかでも注目されるのは、『花鏡』巻一「花間日課」の記述である。そこには、隠逸生活の伴とすべき書物として『老子』『荘子』や『剣侠伝』『列仙伝』をあげている。また、「玉蕤香を薫じ、赤文緑字を読む」とか、「忘形の友と斉諧・山海を談じ」とか書いていて、そこに著者の神異の談や道家的なものに対する関心が現われている。このような関心のありようは、通常の老読書人のものというよりは、むしろ小説家にこそふさわしいものではないか。符節を合するように、『西湖佳話』には、岳飛や于謙の忠節を顕彰した話を収める一方で、葛洪の仙術、済顛・辨才・円沢・蓮池の道行について語った話が多く含まれる。

『列仙伝』を愛読し、『神仙通考』という著作までものした陳湜が葛洪の『神仙伝』を読まなかったとは、とうてい考えられない。『西湖佳話』に、その葛洪を語った「葛嶺仙蹟」があるのは偶然の一致であろうか。葛洪が飯を吐いて蜂に変える話、死魚を放生して蘇らせる話、大旱に雨を降らせる話、井戸のなかから銭を呼び出す話、熱い息を吐いて部屋を暖める話、気のすすまない招待から逃れるために自分の体を腐乱させて欺く話などが、そのなかで語られるが、これらはいずれも『神仙伝』から採られている。ただし、『神仙伝』に葛洪の伝はないので、いずれも葛玄伝に見える話である。もともと葛玄の話として伝えられてきたものを、葛洪に附会したわけである。『西湖佳話』の作者には、このように平然と換骨脱胎をおこなうところがある。

仏教関係についていえば、陳湜の家に仏書があったことは確かである。小築社、読書社を主宰した厳調御（印持）が陳湜の父陳芝仙に『雲棲大師全稿』の貸与を依頼した手紙を、『留青新集』が載せている（巻十四）。『西湖佳話』巻十六「放生善蹟」の主人公はこの雲棲大師すなわち蓮池である。

『西湖佳話』の作者は、このほか、済顛が老猿を往生させる話（「霊隠詩蹟」）、山歌を歌って病を癒す話、井戸から材木を引き出す話、内廷の玉髄香の所在を告げる話（以上「南屏酔蹟」）、辨才が壇を設けて女妖を擒える話（「虎渓笑蹟」）、蓮池が念仏によって雨を降らせる話（「放生善蹟」）など、このんで「仙家の幻術」「仏家の妙用」を語る。

『花鏡』は著者自身の実践にもとづいた記述が他書にない特色とされるが、著者自身は次のようにも述べている。「一二見たことがなく、最善の栽培法を講じないものがあると、花作りを趣味でしている花好きの友人か、或いは花で生活している植木屋に訊ねて、多方面にわたってその秘訣の伝授をうけその新論を取り、復た昔賢の花史や花譜について参酌攷正してから之を録した」。そして、著者としては「訂輯」（巻端）または「彙輯」（封面）の語を使用している。これは、かつて『両漢奏疏』で「訂輯」、『周文帰』で「輯」の語を用いた流儀の延長線上にあるものであろう。

書物の内容、性格の違いにもかかわらず、『西湖佳話』は、書物の作り方の面で、陳湜の出した書物と

明らかな共通点が認められる。『西湖佳話』は短篇小説集とはいうものの、純然たる創作とは言いがたい作品であるが（作者の創作はおそらく「断橋情蹟」一篇のみであろう）、作者自身、これを自らの創作とは認めていない。自序に、「よってこれを史伝志集に考え、これを老師宿儒に徴し、その蹟の最も著われ、事の最も佳きものを取りあげて、これを紀した」と書き、編集者、せいぜい再話者として自ら位置づけているのである。そして、ここでも古呉墨浪子「捜輯」である。

四

『花鏡』は文人趣味と深く結びついた書物である。文人生活の指南書ともいうべき性格をもっているという点では、友人李漁の書いた『閑情偶寄』と対比しうる。現に、周作人のように、『花鏡』からただちに『閑情偶寄』に想いを及ばす人がいるわけであるが（『知堂書話』「花鏡」）、理由のないことではない。

『花鏡』において、特にそれが顕著なのは巻二「課花十八法」のあとに附した「花間日課」「花園款説」であって、そこには「高士」の隠逸生活のあるべき姿を事細かに記している。

文人趣味によって強く彩られている点では、『西湖佳話』も同じである。最も直截にそれを現わしているのは言うまでもなく「西湖佳景」図であって、まさに理想化された文人生活の絵解きになっている。そのなかの幾幅かは、「花間日課」の記述との呼応、吻合が認められる。春は、「午後は愛馬に乗り剪水鞭を執り、斗酒双柑を携えて鶯の声を聞きに往く。午後四時に、柳風の前に坐し、五色箋を裂き意に任せて吟詠する」という。これはそのまま「柳浪聞鶯」図に描かれているとおりではないか。また秋。「薄暮には

畔月香を焚き、菊を培壅し、鴻の空を飛ぶのを眺め、琴数曲を調べる」のだという。「平湖秋色」に描かれているのは、そのような優閑生活の一景ではないだろうか。そして冬。「午後四時に、羔裘（こひつじのかわごろも）を着、貂帽（てんのぼうし）を冠って、嘶風鐙をつけ、蹇驢（ろば）に鞭打って寒梅の消息を探りに行く」という。「断橋残雪」図がまさにその様子を描いている。もっとも、下絵を描いたのが誰であったにせよ、十数年前に「西湖佳景」図の制作を取り仕切ったのは陳淏その人であったのであるから、「花間日課」の記述がそのなかのいくつかをなぞったかに見えるのは、別段奇とするに足りない。

『西湖佳話』において、文人趣味はこの図版部分だけに現われているわけではない。西湖の山水を背景に高人韻士や佳人才子を語り、高人韻士、佳人才子をとおして西湖を語る作品全体が文人趣味の産物にほかならない。

（一）山水、園林

文人趣味の重要な内容をなすのは山水、園林である。

陳淏は、生涯のかなり長い期間、物書きに従事しながら、広く各地の名勝を訪ね歩く生活を送ったと思われる。南京に足場を移していた時期は、李漁の「杖履の老友」として「登臨憑弔」する生活であった（「墓誌銘」）。李漁の遊歴の伴であったというのであるから、陳淏の足跡も、当然ながら南京周辺とか江南地方に限られたものではなかったであろう。晩年の著書『花鏡』は、杭州呉山に隠棲したあとの「園を鋤き圃に芸える」生活（『花鏡』自序）のなかで完成されたのは事実としても、著者自身の豊富な旅行経験の裏打ちなくしては書かれなかったであろう。『花鏡』には現地を訪れて実見したことをもとにして書いたと思われる記述があり、その足跡の広がりを想像させる（たとえば、巻六「蓍草」の項の蔡州上蔡県など）。

胡文祥が陳枚に『芥子園画伝』初集と思われる「画譜」を所望した手紙に、「尊父が胸に丘壑を蔵し風雅を発揚してくださらなかったら、この（画譜刊行という）壮挙はなかったわけで、まことに画苑の一大奇観です」と書いているのも、陳淏が広く各地を遊歴して山水に親しんだことを示唆する。『花鏡』から推すと、その山水跋渉は、自然と生命に想いを馳せる自然観察家のそれであったと考えられる（同書巻二「課花十八法・課花大略」）。

『西湖佳話』には、そのような人物が自分の体験と実感にもとづいて書いたと思われる叙述が散見する。一例をあげれば、「葛嶺仙蹟」に、「……そこで長江にそってまっすぐ京口へ行き、丹陽に転じ、さらに丹陽から常蘇へ行った。常蘇は身を隠すにふさわしい名勝の地がないわけではなかったが、山水が浅促だったので、葛洪はここをやめて去った。臨安までやって来、両峰と西湖の秀美なこと天下第一だったので、大いに喜こび、この土地なら居所を定められると思った」。

『花鏡』巻二「課花十八法・課花大略」にいう。「余は素性花を嗜む。……凡そ之を植えて栄えるものは、その栄えるわけを紀し、瘁むものは必ずその瘁む原因を究める」。このような自然への向かい方は、自然のなかに入っていき自然観察をとおして真理に到達しようとする葛洪の「性命の学」を、ただちに連想させる。「葛洪は役所が暇なときは、羅浮が名勝と聞いて、よく遊覧に出かけ、山水の理をもって性命の学を参悟しようとした。山や川に春夏がくると草木が繁茂し、秋冬がくると草木が衰落するのを見て悟った。これは山や川に盛衰があるのではなくて、気に盛衰があるのだ、と。たまたま梅の花が満開のときに、開くのは開き、散るのは散るさまを見て、また悟った。これも梅に開花と落花があるのではなく、気に盛衰があるために、梅はそれが盛んなときに開き、その衰えにつれて散るのだと」（「葛嶺仙蹟」）。

『花鏡』は園芸の専門書とはいうものの、農業生産の参考に供するための書物ではない。それは、ひとりの文人の「園林花鳥に情を馳せる」生活のなかから生まれた書物であり、したがって、なかにとりあげられる植物に関する技術・知識は、いかに園林をつくるかという観点から述べられている。だからこそ、草花のうち、「色香ともにないものは録しない」（巻六）のである。書物のそうした性格は、文治堂本の封面に横書された「園林雅課」の四字が端的に示している。

『西湖佳話』は、西湖の湖山の本来の面目を写そうとした作品であるという意味で、一種の山水文学であるが、西湖そのものがもともと人為によってしか維持されない半自然であり、いわば巨大な園林である。その意味では「園林文学」とも呼ぶことができよう。

かつて西施に譬えられ、「淡粧濃抹すべてよろし」と詠われた西湖は、いまでは老いさらばえ、無惨な姿をさらしている。荒れた西湖をいかにして蘇らせるか、いかにして生彩あらしめるか。西湖に彩りを添え西湖のために光彩を増す人物と物語がこうして選ばれる（墨浪子自序）。

『西湖佳話』の作者が「生色」（光彩を増す）という語を好んで使用しているのが注目される。「世はしばしば移り変わっても、この詩は伝わり、霊隠寺のために千秋にわたって光彩を加え（生色）」云々（「霊隠詩蹟」）。「そこで、一二の話を挙げて、西湖の光彩を増す（生色）こととする」（南屏酔蹟）。「それで済公が坐化したのち、この酔蹟をとどめて、西湖南屏のために光彩を増した（生色）というわけである」（同）。「高僧の学問は、……行きては仏法のために光を増し、坐しては湖山のために光彩を増し（生色）、埋没すべからざるものがある」（「虎渓笑蹟」）。「……そして、尽きぬ興味をもって語り伝えられ、湖山のために光彩を増し（生色）、千載にわたって不思議を称えられ、伝えないわけにはいかないものがあるのは、

円沢が三生石のそばで李源と約束をかわした話である」（「三生石蹟」）。「増顔色」（顔色を増す）という言い方も、同類であろう。「湖山すらも幾分か顔色を増すことになったのである」（「岳墳忠蹟」）。作者が西湖を一つの園林と見なし、物語の主人公たちを、この園林を点綴する景物に見立てていることは明らかであろう。

『花鏡』中、草木の配置の重要性を説いた「課花十八法・種植位置法」の章において、園林の佳卉は金屋の美人に譬えられる。「名園があっても、佳卉がなければ、金屋に麗人が少ないようなものである。佳卉があっても、配置が拙ければ、玉堂に牧童を列べたようなものである」。園林に草木を植えるときに、寒に宜いもの、暖に宜いもの、高地に宜いもの、低地に宜いもの、各々その所を得させ、「其の質の高下に因り其の時候に随い、其の色の浅深に配して、いろいろ巧く組み合わせ」なければならない。このようにして、四季を通じて常に花を咲かせてこそ、名園の二字に恥じないのであり、「大いに主人（園主）のために光彩を増す（生色）であろう」という。

（二）隠逸

陳淏は、南京僑居のあと、晩年は杭州西湖の湖畔にもどり隠棲した。隠棲の様子を、『花鏡』の序を書いた張国泰は次のように描く。「淹貫（がくもん）の余、老圃（はなつくり）を学ばんと願い、詠歌の暇、窃に陶朱公に附し、花木によって課を分けては、さながら紫媚紅嬌、禽魚を借って情を娯しませては鱗遊羽化を彷彿としている」。彼自身、『花鏡』自序で、読書と花の世話に明け暮れる生活ゆえに、世間の人からは「花癖」「書痴」と笑われると述べたあと、「読書こそは儒家の正務であるから、どうして痴ということができよう。園を鋤きと圃に芸（う）え、鶴を調し花を栽えることにいたっては、聊かもって心を息（やす）ませ老後を娯（たの）しむだけである」という。いみじくも自ら「華（花）隠翁」と号しているとおり、『花鏡』の著者にとって、花つくりは隠棲の一つの姿であった。

しかし、このような濃厚な隠逸気分は、これが著者晩年の隠居生活のなかで書かれたというだけの理由によるものではない。「富貴は吾が願いにあらず、帝郷は期すべからず」という陶淵明の語を引いて、「世人が碌々として営利に没頭するか、さもなくば官職に情を縈（まつわ）られているのは笑うべきことである」と書いているところに、隠逸に強く傾斜する著者の志向が現われている。なるほど、実人生の足取りとなると自ずから別である。明清鼎革後は「跡を窮巷に隠し」（「寿序」）、「飢えに駆られて」杭州を離れたあとの約二十年間は異郷を漂泊する生活であった。それにはちがいないが、生涯の「半ばは園林花鳥に情を馳せる」生活であった（『花鏡』自序）というのも、偽りではあるまい。

一方、『西湖佳話』において、「隠れる」ことが重要な主題の一つであることは歴然としている。霊隠寺に隠れた駱賓王を描く「霊隠詩蹟」と、西湖孤山に隠れ棲んだ宋の林逋を描く「弧山隠蹟」の二篇が特にこの隠逸の問題をあつかっているが、他の作品でも、作者はことあるごとに隠逸への想いを登場人物の口を通して語らせている。「葛嶺仙蹟」で、出仕の道を勧められて、葛洪はいう。「読書は理を明らかにするためだけのもの。功名富貴などどうでもよいのです」。「断橋情蹟」では、元朝が儒を軽んじたために志ある人はだれでも役人になろうとせず、「山林に隠れる」ことを望み、詞曲を作って日を送ったと述べ、そのなかの一人、文世高という若者を主人公として登場させる。彼は「功名の念がうすく詩酒の情が濃かった」。西湖のほとりで見初めた劉秀英との愛を成就するために、一応は科挙の試験を受け、これに合格する。しかし、その後は官途につかず、西湖にもどって気ままに湖山を楽しむという結末である。「放生善蹟」

において、のちに蓮池大師となる青年は両親や妻から科挙を受けて官途につくことを期待されるが、「まったく功名の念がなかった」。

『西湖佳話』十六篇に語られる人物のうち、とりわけ「弧山隠蹟」の林逋の生き方は、隠逸への傾斜という点において、『花鏡』や「墓誌銘」をとおしてみる陳淏ときわめてよく重なっている。両者は人生観や生き方を共有することはもちろん、墨浪子が林逋を語り陳淏が自己を語る、その措辞においても類似が見られる。

「適志」ということの強調はその一つである。「弧山隠蹟」においても、『花鏡』においても、これが人生の根本的な価値として強調されている。「人生において大事なのは志に適うことである。志が適えられることこそがわたしには大事なことだ。わたしの志が適えられるとは結婚でもなく功名富貴でもない。ただ青々とした山や水だけがわたしの情にかなう。……」と、林逋は考える。『花鏡』の著者は、「世人が碌々として営利に没頭するか、さもなくば官職に情を縈られているのは笑うべきことである」といい、四季を通じて草花のなかで暮らす隠逸生活は、「情を怡げ志に適う。これを楽しんで疲れを忘れる」という。

「志に適う」隠遁生活は、林逋にとっても『花鏡』の著者にとっても、木や花や生き物を相手にする生活である。それを端的に表現した言葉として、「弧山隠蹟」では「調鶴種梅」という言い方を用い、『花鏡』自序では「調鶴栽花」という言う方を用いる。林和靖は、弧山に場所を定めると、「朝に楼を置き、夕に片石を置き、土地を選んで花を植え、時に随って樹を植えたので、三四年もたつと弧山の風景は見違えるようになった」。――作者の園芸に対する造詣を、このような叙述から看取することは容易であろう。「園中、あでやかな桃や李、牡丹の名花、春の蘭や秋の菊、木犀や蓮など、植えないものはなかった。しかし、

なかでも梅をことのほか好んだ。高いところにも低いところにも、山沿いにも川沿いにも、家のまわりにも欄近くにも梅を植えた」。また、林和靖は王随にいう。「逋の才は花や木を栽培し鳥や魚を飼育し、山水を吟詠するだけのものです」。陳堯佐、梅堯臣、龔宗元などの賞賛もどこ吹く風と受け流し、ただ風花雪月、西湖の四季を楽しむ生活である。「鶴を調し梅を種えることにいたっては、その性命そのものであった」。一方、『花鏡』では、自序において、「園を鋤き圃に芸え、鶴を調し花を栽えることにいたっては、聊かもって心を息ませ老後を娯しむだけである」と述べる。

『西湖佳話』と『花鏡』は、執筆・刊行に約十五年の隔たりがある。なによりも通俗小説と園芸書という基本的な性格の違いがあるのであるから、比較のための充分な材料が得られないのは致し方ない。とはいうものの、両者には、共通する人生観や生き方が表現されているばかりでなく、こまごまとした措辞のうえでも類似・同一性が認められる。陳淏の出した『花鏡』などの書物と『西湖佳話』とがたがいに呼応しあっていることは覆いがたいものがあるというべきであろう。

墨浪子とは実は陳淏であり、したがって『西湖佳話』を書いたのは陳淏その人であると断定してよいのではないか。作者墨浪子は、実は自分で図版部分の制作も取り仕切ったからこそ、「西子湖に憧れながら親しく目にすることのできないひとは、図をひらいて一覧されたい」と書いたのである。図版の制作を取り仕切った湖上扶揺子は、ほかならぬ『西湖佳話』の作者本人であったからこそ、「私は長年この志を抱いてきた」と書けたのであり、また、自分の裁量で自分と他の制作関係者の実名を出すことができたのである。

注

(1) 徐震は「秋濤子」と呼ばれているために、一般には名は震、字は秋濤とされているが、修雷が字であり、秋濤はその号と考えられる。

(2) 王青平前掲論文。

(3) 以下、『花鏡』からの引用は、杉本行夫編訳『秘伝花鏡』(一九四四)に従う。ただし、旧かな遣いを現代かな遣いに改め、また必要に応じて訳語を一部改めることがある。